

ヨーロッパひとり旅。  
あなたは、このピンチを  
どう切り抜ける？

Part 3

ヒグチ サトシ



脱ツアー旅行！  
個人旅行はスリス満点！

第三弾：ケーブルカーが終了で下山できない？

ヨーロッパ旅行中に突然遭遇したピンチと、  
それを、どのように切り抜けたのかの実話

ヒグピー書房 定価 無料



## ケーブルカーが終了で下山できない？

---

夫婦で初めて、夏にスイスに行った時の事だ。

アレッチ氷河をまじかに見る為に、ベットマーアプルに行く事にした。

その氷河を、山岳列車で有名なユングフラウ鉄道の終点であるユングフラウヨッホから見ると、氷河は遥か向こうで右に曲がっているのが分かる。ベットマーアプルは、ちょうどその氷河が曲がり終えた辺りである。従って氷河がカーブしているのをまじかに見るには、もってこいの場所だった。

ベットマーアプルは、標高1950mの森林限界に位置するリゾート地で、夏はトレッキング、冬はスキーで賑わう町である。氷河を見る為には、町からケーブルカーに乗って氷河際のベットマーホルン山（標高2643m）の頂上付近まで行く必要があった。

そこまで行くと、眼下にカーブして来た氷河を見る事ができる。

ベットマーアプルに到着したのは午後2時過ぎ。まずは予約していたホテルにチェックインし、部屋に荷物を入れると、氷河を見る為にすぐにケーブルカーの駅に向かった。時間は既に午後3時になっていた。

まずケーブルカーの営業時間を確認する。これから氷河を見る為に頂上のベットマーホルンに行くには、ちょっと時間が遅くなってしまったが、それでもなんとかケーブルカーの営業時間内で往復してこれそうだった。

本当は十分に時間に余裕を持って氷河を見たかったのだが、思いの外、ベットマーアプルに着くのに時間がかかってしまったのでしょうがない。それに何より今日は午後になっても雲一つない快晴だ。

明日にすれば良いのかもしれないが、山の天気は、いつどうなるかわからないので、この良い天気を逃す訳にはいかない。

夏と言っても、もう9月の中旬。

観光のピークが過ぎたリゾートに、観光客の姿は数える程しかない。

その上、既に3時を回っているのでケーブルカーの山麓駅に観光客の人影はなかった。

私達は往復チケットを買って、急いでケーブルカーに乗り込んだ。

眼下に見える山の斜面を見ながら、冬は、どんなグレンデになるのだろうか？と想像しているうちに、頂上のベットマーグラートに到着した。私達は早速、現在の時刻とケーブルカーの営業終了時刻を確認して、アレッチ氷河が見える稜線へと向かった。営業終了時刻まで40分程あった。

眼下に見えるアレッチ氷河は、すごい一言だった。

氷河にはモレーンと呼ばれる2本の黒い線が見える。これらは平行なので、あたかも車の轍の様に見えた。モレーンにより、氷河が動いている事を実感させられる。

最近の温暖化により、氷河が消えつつあるというが、ここにも影響が及んでいるのだろうか？。本当は気が済むまで見ていたい所なのだが、ケーブルカーを山頂駅で降りた際に一組の観光客を見た以外は誰にも合わなかったので、なんとなく心細くなり、若干早めではあるが私たちはケーブルカーの山頂駅に向かった。

ケーブルカーの駅に戻って私たちは驚いた。駅のシャッターが閉まっているのだ。標高2600mもある場所に取り残されてしまった。

時間を確認すると、まだ営業終了時刻には10分程度ある。

あせってシャッターの窓から駅構内を見ると、腕っ節の強そうな係員がケーブルカーを駅舎にしまっているのが見えた。上ってくるケーブルカーは、この頂上の駅舎にしまわれているので、下りのロープにケーブルカーは付いていない。

「やられた！」

私はあせって、シャッターを手で叩いた。「ガンガンガン」という音が駅舎に響き渡った。

すると係員が気づき、こちらの方を見て何やら言っている。何を言っているのかは分からないが、そぶりから「そこにいろ」と言っている様に思われた。

おそらくあの係員はケーブルカーをしまい終えると、最後のケーブルカーで下山するのであろう。その際に一緒に乗せるつもりらしい。

しかし、ケーブルカーをしまうのは、結構、時間のかかる作業のようだった。

私たちはしばらく、シャッターの前で待っていたのだが、何となく不安になってきた。

なぜなら「最後のケーブルカーと一緒に降りる」というのは、単に私の推測でしかないからだ。

ここは麓のベットマーアプルまでトレッキング・コースが整備されている。時刻は今、午後4時過ぎ。日が落ちるのは午後8時を廻ってからなので、もし徒歩で下山しても日没までには麓に戻れそうだった。

何となく不確かな約束を信じて待っているより、今なら自力で下山可能だ。そう判断した私は、2人でトレッキング・コースを下山することにした。

ここは標高2600mの森林限界。周囲は岩場の山岳地帯だ。トレッキング・コースも山道と言うよりは岩場のコースである。そして特にコースの出だしは急峻な崖となっていた。他にコースを歩いている人は既に誰もおらず、下山する私達の周りを日中とは異なる、ひんやりとした風が音を立てて吹き始めた。

この音は、周囲に風の流れを遮る物が何も無い事、すなわち、ここが標高の高い場所であることを私たちに教えていた。

麓まで標高差は600m。先は長い。暗くなる前に下山できるだろうか？ 私は不安になった。こういう場合の唯一の救いは一人ではないと言う事だ。お互いに声を掛け合いながら、浮き石に注意し慎重に下山した。

だんだん下山のベースをつかみ始めた頃、なにやら空から声がした。

上を見ると、先ほどの係員が下山しているケーブルカーの窓を開け、大声を出していた。

何を言っているのか分からなかったが、おそらく「なぜ、待ってなかったんだ？探したんだぞ」と言っているのだろう。

今になって思えば、一緒に下山させるつもりのお客がいなくなると、放置する訳にも行かず、あれこれ探す事になってしまったのだろう。申し訳ない事をしてしまった。

ケーブルカーに乗せてもらえば、あっという間に下山できたな、と少々後悔した。

しかし、今はもうトレッキング・コースを下山しているのだ。はやる心を抑えつつ、慎重に下山する必要があった。景色を楽しみながら歩くぐらいの余裕が欲しい所だが、残念ながら今はその余裕はなかった。

下山を開始して1時間。標高が下がるにつれ麓の町が大きくなり、それに応じて心の中から徐々に不安が消えて行った。この調子なら問題無く、明るいうちにベットマーアプルに戻れそうだった。

少しして、ベットマーゼの湖で休憩している別のトレッカーに追いついた時には、いつもの様にトレッキングを楽しむ余裕が出て来た。

6時頃、無事に麓に着き、まだ十分に日が高い中、ホテルに戻ったのであった。何事も無くて良かった！



ユングフラウヨッホから見たアレッチ氷河(右に曲がっているのが確認できる)



ベットマーホルンから見たアレッチ氷河



氷河の展望台であるベットマーホルンへ向かうケーブルカー



下山途中でベットマーゼ湖を見下ろす